

眺望景観をてがかりとした 都市観光の新たな可能性

はじめに

近年、我が国においても都市を巡り、地元の人々と交流し、歴史や文化を深く学ぶという観光スタイルが人気を博している。これは観光客を受け入れる側にとっても、自ら都市のよさを改めて見直すよききっかけであり、都市のあらゆる資源を最大限に活用し、都市の魅力アピールすることが求められる。

本稿では、こうした地域資源の一つとして眺望景観の存在に着目してみたい。眺望景観の多くは、その明確な物理的特性(眺望点と眺望主対象との対応関係)や人間に備わる普遍的の視覚特性によって、必ずしも共通の文化的背景を持たない住民と来訪者間での共有の都市環境イメージの形成を促す。また、国土のおよそ4分の3が山地である我が国で

は、都市の背景に山を感じられないほうが例外的であり、都市の立地や設計、施設の配置はその眺めに依拠しているケースもしばしばみられる。また、丘や坂道から市街地への俯瞰景、伝統的な借景庭園、あるいは社叢、並木、河川などの自然的要素を取り入れた眺望、洋風建築等をアイストップに置いた象徴的なヴィスタ景など枚挙に暇がない。

以下本稿では、都市空間に現れる五つの典型的な眺望景観(群)を想定し、各々をてがかりとして、どのような都市観光のスタイルが生まれ得るのか、その可能性を示していきたい。また、それを実現するための方策に関しても景観施策を中心に可能な限り言及していきたい。なお、本来であれば、観光客とそれ受け入れられる地元の両者の立場にたった論を展開すべきだが、紙幅の都合上本稿性をより高めることで、多くの人々が集い、賑わい、流れる空間となる可能性を多分に有している。沿道建築物等の高さやデザインの統一、あるいは路上構造物の整理などが求められる。

地域の生活文化に触れる 山並み眺望

都市から周囲の山々に対する眺めは、特にそれが雄大なパノラマ景である場合や非常に整った構図として望むことができる場合等その物理的特性が、都市を代表する景観として来訪者に大きな感動を与える。

しかしながら、都市観光における山並み眺望の役割はそれだけではない。山々に対する眺望は、生業や信仰等の地域の風俗慣習のなかでもしばしば重要な位置を占め、日常生活に密着したものである。また、顕著な眺望点は地域活動の拠点ともなり得、特に眺望対象となる山が富士山などのある程度の知名度を有するとき、それを誇る地域の人々と地域の人々との交流の機会を生み出す。

ではまず、前者の視点を中心に論ずることとする。

都市のガイドマップとなる 高所からの俯瞰景

起伏に富む我が国の多くの都市では、超高層ビルに登らなくともちょっとした丘、高台の城址、あるいは坂の上から市街地を一望することができる。そして、顕著なランドマークに目を引かれると同時に、都市の地形やスカイラインを把握し、「鳥の目」に近い視点で都市の全体的な姿を瞬時に捉えることを可能にする。特に、都市観光の起点としてこの眺めを得れば、自ずとこれから待ち受ける「地上」での行動に思いを巡らす。逆に、お終いにこの眺めを得れば、その空間の開放感に疲れを癒されながら、一日の軌跡を振り返ることができる。

2004年から翌年にかけて地域活動の充実や交流の促進などを目的に国土交通省関東地方整備局によって「関東の富士見百景」事業が行われ、関東一円から128景が選定された。このうちの1つ茅ヶ崎市の旧南湖院では、市民グループが主体となって、景観のよさを伝える講座の開催、あるいは眺望点付近の建物を

利用したコンサートが催され、地域内外の交流が図られた。また、東京都荒川区に位置する日暮里富士見坂においては、ダイヤモンド富士を見る会が開催され坂を埋め尽くすほどの人々が集う。そのほかの地点でも地域自ら案内板の設置や清掃活動など、手づくりの観光資源としての魅力を打ち出しており、地域の人々の生活文化に肉薄できる絶好の場となっている。

遊歩を促す河川空間の 連続的眺望

都市の河川空間においては、橋から流軸方向へ、あるいは川岸から対岸へ、背後や周囲の市街地も含めた多様な眺望景観が存在する。眺望景

まずはこのような眺望点を見出し観光マップ等に示すこと、公園や広場等魅力ある空間として整備すること、そこへのアクセスを確保することが求められるが、同時に人々は、都市のスカイラインの美しさも求める。となると建築物の高さやデザインの一貫性や調和が景観行政上の課題として挙がってくる。実際、このような眺望景観を保全の対象として捉えている自治体は多く、景観の規制誘導を伴わない眺望点の指定制度(小樽市等)から建築物等の景観コントロール(熊本市、銚子市等)まで様々である。

都市の「ハレ空間」を体感する ヴィスタ景

都市を代表する眺望景観の一つに、官庁舎や博物館等の記念碑的建造物を対象とし並木や建物群によって観の前景要素となる川面に対する不易なものとしての安心感、また遠方の山並みや都市のなかの特定の眺望対象に対する眺めも含め次々と移り変わる新たな眺めに対する期待感等効用は様々であるが、眺望景観の連続性が河川空間に歩く楽しみを付加している。

東京都千代田区、新宿区、港区の境界に位置する江戸城外堀跡は、江戸東京観光をする上で、皇居とともに江戸城の歴史や地域的な広がりを知ることでできる貴重な歴史遺産である。土塁上の遊歩道からは、外堀の谷地形を感じる眺望景観が連なり、また牛込や四谷等見附門跡の石垣や迎賓館(旧赤坂離宮)や橋梁など各時代の特徴的なモニユメントに対する見直しも確保され、多様な景観が次々と得られることも当該歴史遺産の価値の一つとして捉えることができる。この史跡としての保存管理計画(2008年3月策定)のなかでは、「親しみながら散策できる」ことが重要な将来目標像として挙げられ、保全すべき眺望点が具体的に示され、それをつなぐ遊歩道の整備

て軸線を強調したヴィスタ景を挙げることができる。人々はその起点で立ち止まり写真を撮り、また対象となる建造物の方へ歩みを進めつつその象徴的な眺めの歴史性や芸術性を賞美する。観光という非日常的体験のなかで、さらに非日常的性の高い「ハレ空間」として、このようなヴィスタ景の存在価値は大きい。

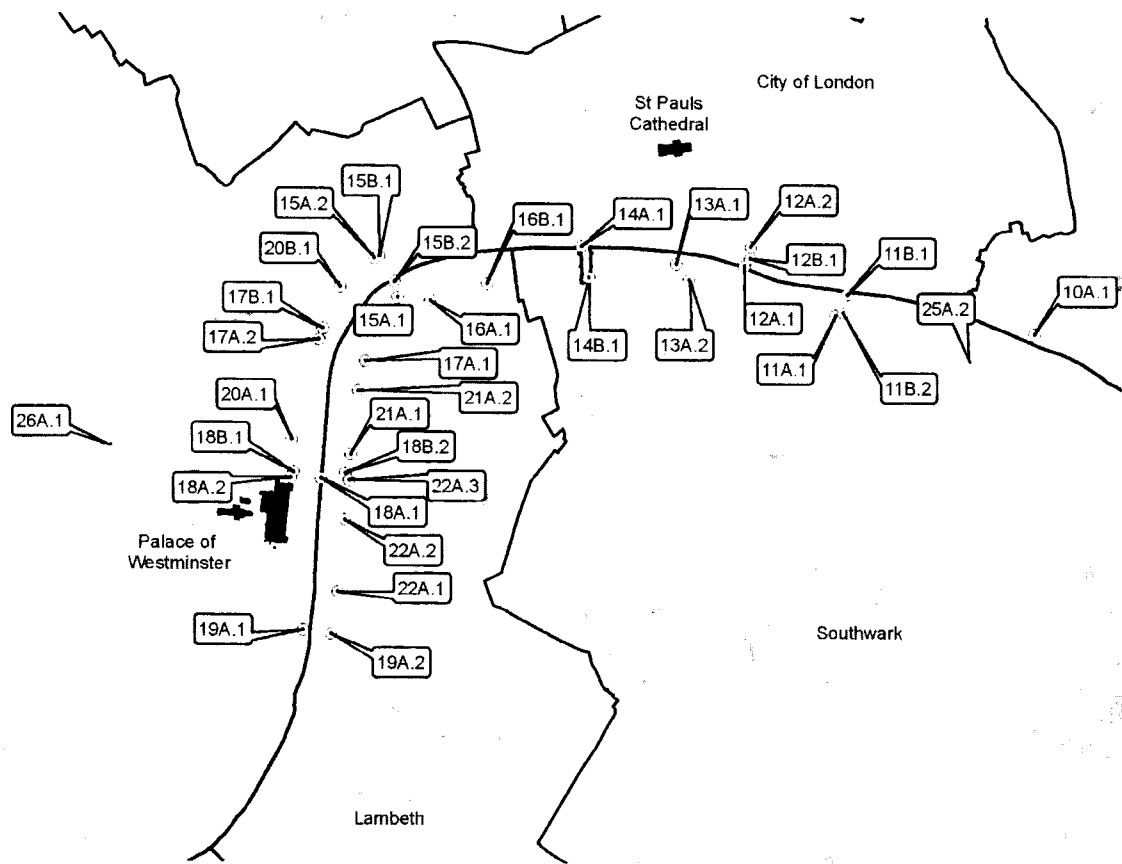
その価値を維持・向上させるためには、その原初的な状態を保全することが肝要である。特に背後や周囲の建築物や広告物等の高さやデザインをコントロールしていかなければならない。現在、いずれも重要な観光資源であるが、文翔館(山形市)、国会議事堂、聖徳記念絵画館、迎賓館(東京都)、原爆ドーム(広島市)等では、眺望景観保全のための景観コントロールが行なわれている。

また、明確な軸線を有し、都市の骨格となるような右記に類する空間として、中心商業地における目抜き通り、駅前通り、寺社への参道等がある。たいていこれらの多くは主要な観光動線でもある。見通しの効いた街路景観を強調し、そのシンボル

が謳われており、今後の各区の景観計画や公園整備を含め、具体的なアクションが期待される。

一方、このような都市観光の舞台を実現している例として英国ロンドン市を紹介したい。市の中心部を流れるテムズ川沿いには、セントポール寺院、国会議事堂、デザインの優れた橋梁等の卓抜したモニュメントをはじめ、印象的な建築物群が存在する。そして、川沿いの遊歩道を歩き、そして橋を渡れば、次々と変化する都市のパノラマ景観、また時おり忽然と現れるセントポール寺院等のモニュメントへの見通し等、多様な景観体験が可能となる。こうした歩いて楽しめる空間を維持、向上させるために、近年ロンドン市では以前から行なわれてきたセントポール寺院や国会議事堂に対する戦略的眺望 (Strategic View) の保全に加えて、新たな眺望景観保全の取り組みを始めている。2004年市長が発表したロンドンプランによって、テムズ川沿いにおける川岸や橋上の10数の眺望点が設定され、そこから川沿いの眺望景観 (River Prospect)

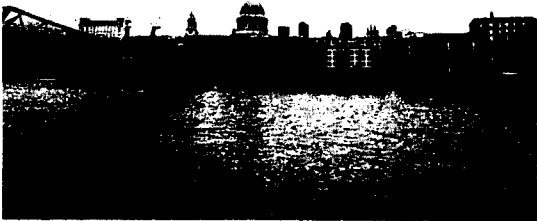
ロンドン市眺望管理計画 (LVMF) で示されているテムズ川沿いの眺望点の位置



ロンドンブリッジから西方向への眺望 (10A.1)



テムズ川南岸 サザーク地区から北方向への眺望 (13A.2)



ウオータールーブリッジから東方向への眺望 (15B.1)



眺望点をネットワークするテムズ・バス

が保全対象として位置づけられ、主要モニュメントへの見通しの確保や全体的なスカイラインの調和などが目指すべき景観像として示されている。さらに、2007年には、ロンドン市眺望管理計画 (London View Management Framework) が策定され、各眺望景観に対する具体的な保全の方針・方法が示された。加えて、何と言っても川沿いのよく整備された遊歩道 (テムズ・バス) が、各眺望点をスムーズにネットワークし、歩いて楽しめる散策空間を実現している。

海が都市の重要なシンボルである熱海市では、熱海駅から海岸までの主要な動線において海への見通しや見晴らしを確保するべく、道路を景観計画のなかで景観重要公共施設に位置づけ眺望点等の整備を進めていくことを構想するとともに、景観地区 (2007年12月指定) によって建築物の高さ等のコントロールを進めている。

一方、天守閣を残す全国各地の旧城下町においては、市街地から城への眺望確保のための高度地区等を活用した建築物の高さの制限の取り組みが見られる (丸亀市、唐津市等) などの、現在のところ、右記のように重要な眺望点を見出したり、また

それらをネットワークするような観光施策を講じている例は少なく、今後、眺望景観の積極的な活用が期待される。

眺望景観の「保存」から「活用」へ

特に近年景観行政においては、眺望景観の構図の美しさやモニュメントへの見通しを確保することを目的とした眺望景観の「保存」の取り組みが積極的に進められているが、それらは都市空間のなかから切り離され、額縁に納まってしまいうようなことがあってはならない。シンボルとなるヴィスタ景や俯瞰景であればどのように眺望点にアプローチするか、また複数の眺望景観が点在・連続する場合はそれらをどのようなネットワークするかといった都市空間における関係性や連続性に配慮していく必要がある。加えて、観光マップへの記載や現地での案内板の設置等も進めなければならぬ。こうした眺望景観の「活用」の概念が高質な都市観光の実現に大きく貢献するものと考えられる。

都市イメージを活かした回遊を生み出すランドマークへの眺望

港町や城下町のように都市のイメージが共有され、かつそのイメージ形成に大きく関わる港や城等の特定のランドマークへの眺望景観が複数存在する場合、仮にそれぞれの眺望景観の質がそれほど高くなくとも、観光客にとってその眺めは、大体の方角を察知することを可能にし、まちを歩くことに対する安心感を与え